

昭和54年度決算について

常務理事 今井 康兼

以上消費税と金納税の
 徴入、〇〇〇万円と
 明した消費取入合計、
 五〇〇万円との差額四
 五〇万円が消費支出
 の前年度繰越消費支
 徴七、〇〇〇万円と併
 せて、翌年度に繰越
 支出超過額である、
 五〇〇万円が、翌年
 度に繰越支出超過額
 として、今後の法人
 連として、留の配
 分は、

(財務局長、七

歷年獎標總消費支出總額	4,599,420,994	902,185,839	
-------------	---------------	-------------	--

1.	特	别	寄	付	金	102650000	83091715	19582828				
2.	一	般	寄	付	金	0	535000	△ 535000				
3.	现	金	寄	付	金	60000000	23021751	△ 22021751				
4.	补	助	金			2572116000	2782355588	△ 210239586				
5.	国	库	补	助	金	23687000000	2577300000	△ 2090300000				
2.	地	方	公	共	团	体	补	助	金	203416000	204625586	△ 1209586

11. 保險 料 費 支 出	8717000	8000289	716711
12. 薪 酬 託 費 支 出	293903758	277494039	16409719
13. 賃 借 料 支 出	98633895	98633895	0
14. 租 稅 公 課 支 出	18672000	392275	1475725
15. 諸 金 費 支 出	2109000	1914200	194800
16. 文 字 工 數 料 * 保 留 支 出	37878950	37878950	0
17. 交 際 費 支 出	5211317	4785523	425794

消費收支計算書

[illegible][illegible]

ジャン・ポール・サルトルの思い出



鶴嶋 雪嶺

サルトルの生涯は、いくつかの分野ですばらしい業績で飾られている。その中で最もよく知られ、また最も重要であつた哲学については、私は語の資格がない。ただ幸いなことに、おそくサルトルの生涯にとって一つの転機でもあつたであつたベトナム反戦運動については、パートランド・ラッセルが提唱した「ベトナムにおける合衆国軍隊の戦争犯罪を裁く」国際法

歴史を変えた知性と正義

「ベトナム裁判」に参加して

延」(ベトナム裁判)にともに参加したので、私にとっては忘れることのできない強烈な思い出がある。

ベトナム裁判は、サルトルが日本からヨーロッパに帰るのを待って動き出した。いってよい。私は準備の過程から参加していたので、そのことははっきりと憶えている。裁判の設立会議は、一九六六年十月にサルトルが出席できる日取りでロンドンのホテルで開かれることになっていた。私達ははたしてサルトルが間に合うかどうかをばらはしながら待っていた。サルトルとシモン・ド・ボ・ボワールは日本からロンドンに直行した。最初パリが考えられていたが、ドゴール政府は合衆國に遺憾してその開催を許さず、結局ストックホルムに決まった。

今ひとつははらなせられたのは、サルトルが法廷開催までにアフリカから帰ってくるかといふことであった。アラブ・ゲ

た。最初パリが考えられていたが、ドゴール政府は合衆国に遠慮してその開催を許さず、結局ストックホルムに決まった。

てくれた。日本を出て半年あまりの私には、日本での講演旅行から直行してきたサルトルがうれしくもあり、懐かしくも、そのた、会議の日であったか、その健康も心配された。

前日であったか記憶は定かではないが、私はサルトルのとうとうへ挨拶にいった。で、それは日本のことも聞きたいと思った。しかし日本のことで話し合うことは「英語がよく話せないのだから」ということでえんきよくにこたわられた。

サルトルは法廷開催の直前にストックホルムにやってきた。まず到着直後の記者会見にびくりするほど多くの世界中の記者が集まったが、サルトルがジャーナリズムの重要さを訴えたのが印象的であった。

法廷の期間中、事務局次長の

この裁判には、サルトル、ポーワールのほかに、イタリーのレリオ、パソン（國際法）、ユーゴスラビアのウラジミール・ヌシエ（政治学）やロシア研究で有名なイザック・ドイッチャーなどが参加したが、その成功にはつきりとした見通しをもっていたものはなかったのではなからうか。イギリスの新聞がラッセルの顔をしたドン・キホーテがやせ馬に乗って風車に立ち向かう漫遊を載せていたが、それこそ多くの人の気持ちをつまみに表わしたものでいえる。

私はいつかここでサルトルと衝突しなければならなかった。まことに討論したのでは他の人の支持が得られないのだからここにサルトルを怒らすようなテクニクをした。「英語が語せない」といつていたポーワールが、私の英語の発音が終わるのを待ちかねて英語で弁じ始めたのを今は懐かしい思い出であらう。

この法廷は当初の予想とまったく違つて、ベトナム戦争そのものにさう決定的な影響をあたえた。

性善とか、正義とか言つて、そ

設立会議から翌年五月の第一回の法廷までの間に、事務局は法廷を開く場所をさがして必死
ありし日のサルトル（左）とポー・ボワール（クランストン著・堂庭一郎訳『サルトルの世界』から転載）

れまでもたつた無力に思っていたことが実際に歴史を大きく変えることがあり得るのだということを知ったことが、サルトルなどから学んだ最も貴重な教訓であった。

（経済学部教授）

れまでもまったく無力に思っていたことが実際に歴史をさぐる姿をみるとがかり得るのだということを知ったことが、サルトルなどから学んだ最も貴重な教訓であつた。

(経済学部教授)

新刊紹介

法学部教授 山川雄巳著
「政策過程論」
(舊林社・一三〇〇円)

前者はいちばやく情勢要素としての政策に著目し、政策研究と政權過程論の結合をはかるべく「政權過程論」という政治学の新領域を意欲的に開拓してこられたが、書はその成果の一部を集約したものである。

第二の芝村熊樹氏の「大都市における権力と民衆の動向」では、この期の都市の膨張とそれに伴う都市社会での矛盾を解消しようとして行われる強圧と教化の実態を明らかにしている。小田康徳氏は第三論文「独占資本主義の確立と佐友キームの小説を楽しんで、友人と論戦のあけく、一流ではないが、かといつて三流でもない」「二流の

本書の構成は、おそ次のようである。まず、政策の問題を準備（序章）に検討し（序章）、ついで政略（第一至第五章）を再吟味（第一章）した「政策過程」の構造を形成・定・実行・修正の総過程において分析する（第二章）。次に政治的余の政策能力改善を念頭に、経済學と公約（第三章）、海運學と公約（第四章）、水産學と公約（第五章）の鉅山裁判を通して両者の関連性を追求してゐる。第五論文松岡文平氏「友愛会思想」、第六論文石月靜恵氏「婦人運動の展開」、第七論文白石正明氏「部落改善運動から水平社の創立へ」「第八論文おきた。」

（中農盛三）

經濟學部教授 荒井政治家著
『經濟社会史入門』
一西洋と日本―
（東洋經濟新報社）
二六〇〇円

本書は、永年にわたり精力的な研究を続けてられた著者が、新しい観点にたち研究成果を固められた概説書の一つ。内容は、中世の農業社会から現在の工業社会にいたる経済社会の発展を、市場経済の形成・発展という視点に立って、詳細かつ平易に叙述されている。中心的課題は、資本主義市場

本書では、機能・技術的合理化視点が堅固に貫かれているが、この点、注目を集めた前著「アメリカ政治学研究」の中で示唆された「価値理論深化の必要性」の観点の関連で重要な意味を言えるように思われる。

(真鍋俊三)

谷沢教授がかつての同人雑誌仲間の間井敏と、三十年ぶりに舌戦を交えた読書論である。とはいっても、そこはそれお互いに本の虫、つかみ合いのけんかをするわけではない。いってみれば巨人・阪神のOB戦、川上対藤村、中尾

（佐々木康雄）

・一〇〇〇円

経済の形成と変貌、そして二度の長期不況と二度の世界大戦を契機として、どのような変貌がとげられたか、また西欧経済史の立場にたって日本の位置づけを試みることに、さらに経済発展を第三世界を含めた国際比較に求めることに、おかれている。具体的な構成は、序章を含め七つの章からなり、経

「大正期の
権力と民衆」
(法律文化社・一九〇〇円)

明治維新から半世紀を距てた大正期というのは、第一次世界大戦未騒動が起き、本格的な独占資本主義が確立するなど日本資本主義社会構造に大きな変化が現われつつある。この大正期と主としてこの本は、この大正期の手

対別当、長岡村山山のゲームを樂しみながらの熟戯が繰り広げられる。その点が打率はかりを気にしたハーフスイングの読書論と違ふところである。のびのびと投げ、かつ打つ夢の麗宴となつて、読者を「読書の招宴」へといざなう、そして読者の章には「同時代の日本」の数珠がかけられ、西欧からの位置づけがなされてゐる。

経済社会の発展、中世経済―前市場経済、重商主義―市場経済への過渡期、産業革命―市場経済の確立、大量生産時代―市場経済の構造変化、而大戦間―市場経済の後退、第二次大戦後―多様化する経済体制、と時代区分しながら、その

この時期である。この大正期を遡る。このころにさきく、人生の40年を振り返る。そのとき、日本の航路として政治に社会に新しい動向がみられた点を明らかにしようとして、小山に示氏を説く。その東航の軌跡は詩歌、推理小説、SDから、楽しみとしての小説者にも理解しやすい姿となっている。ただ表題については内容と

の関連で一考されるべきであろう。

(角山寧洋)

A・C・チャン著
経済学部教授 小田正雄
同 助教授 堀江義
大住崇治
高森 寛

共訳

「このような時代を背景に、企業危険を学際的に研究する目的で、『日本リスクマネジメント学会』が設立されたのは一昨年の秋であった。」

著者は、リスクマネジメント研

「現代経済学の
数学基礎」
マズローヒル好学校
上巻・二六〇〇円
下巻・二五〇〇円

経済学に数学が利用されるようになったのは一七一一年のシヤ
ンネ・チェバの書物にはじまる。
これが限界革命を経た今日では、数

究におけるわが国の数少ない先覚
者の一人であるが、本書におい
て、外国文献を批判的に摂取し、
わが国の土壌に適合した固有の理
論体系確立をめざすと共に、企業
危険管理を、単に、保険の処方の
域にとどめることなく、経営管理
全体から論じている。

このように本書は、従来のリス

数学がますます重要となり、数学を知らなければ近代経済学の理解もままならぬ状態である。使われる数学も微積分だけでなくとまらず微分・差分・差分方程式、集合論、線形代数、位相数学など多岐にわたっている。このたび訳出されたチャタンの書物は、見事にこの多岐にわたる数学を体系的にまとめあげ、クマネジメントの守備範囲を拡大し、企業危険を企業内外の諸要素と有機的に結合させて論じ、リネアメントを「企業の創産を企て防止し、企業経営の合理的運営を企てるためになされる、企業危険の科学的管理」として位置づけたこととした意欲作である反面、含蓄のある専門用語が、讀者特有の明晰な文意により解説されている。川

第一・二部で経済分析に数学的方法がいかにかに利用されるかを論じ、線形代數に關連して市場産業連関論が登場する。そして、第三・四部では微分の概念が導入されて比較靜学が考察される。第五部で積分法が展開される。

本書は現在、上述の学会の理事長であり、まさに、人と時を得た好習といえる。企業経営に関心のあつた人々に、ぜひ一読を勧めたい。(高尾裕三)

るよりは、微分方程式の基礎とする点に著者の新しい視点を感ずる。しかし、何といつても著者の扉前は、第六部での線形計画法、非線形計画法、ゲームの理論で、いかんなく発掘されている。これら新しい理論は、凸集合の理論を利用し、グラフをできるだけつかい、懇切丁寧に説明されている。

梅雨未だ明けず。何か鬱陶しい学園だ。それだけに、真夏の太陽とあつた汗がきつる。

編集後記

「リスクマネジメ
ントの理論と実務」
(アイヤモンド社、
一五〇〇円)

商学部教授 亀井利明著

(神保一郎)

夏休みに想いをはせながら、この号はレイアウトされた。企画に当たっては、いろいろなアイデアが浮かんで消えた。多くの先生方や院生、学部学生のご寄稿を得て、何とかそれなりに

近時、政治・経済の動向は目を
 みはるばかりであり、従来、個別
 的に企業独力で蓄積してきた企業
 危険対処のノウハウも、急速な陳
 述の体制を整えることがで
 きた。
 (岡田・村井)



► 編集後記 ◀

梅雨未明けず。何か鬱陶しい学園だ。それだけに、真の太陽とあぶら蟬が待ち焦られる。夏は若者のシーズン。青春は素晴らしい。

この時期に、夏休みに想いはせながら、この号はレイはせながら、企画に当たっては、いろいろなアイデアがかんでは消えた。多くの先方や院生、学部学生のご意見を、何とかそれなりに信の体裁を整えることができた。

(岡田・村井)